

# モモせん孔細菌病春型枝病斑の早期せん除の目安

～ 疑わしい枝は、とにかくせん除～

山口千明（農業総合試験場園芸研究部常緑果樹研究室  
前・東三河農林水産事務所農業改良普及課）

【平成29年4月17日掲載】

## 【要約】

豊橋市では、モモの難防除病害であるせん孔細菌病対策として、春型枝病斑の早期せん除が行われている。せん除の目安は、展葉始期の枝の状況であり、展葉しない枝や他の枝と比べて展葉が遅い枝を「疑わしい枝」として徹底的にせん除している。せん除の時期は、展葉状況の差が分かりやすい4月下旬までに実施することが望ましい。また、春期に枝のせん除を行うため、冬期せん除時には、結果枝を1～2割多く残す必要がある。

## 1 はじめに

モモの難防除病害であるせん孔細菌病は、豊橋市のモモ栽培でも以前から被害があったが、平成21年秋の台風襲来後、果実への被害が甚大になり、収穫量に多大な影響を及ぼした。登録されている薬剤は少なく、一度拡大すると抑えることが難しいことから、感染源となる春型枝病斑（スプリ



写真1 典型的な春型枝病斑（赤丸部）

ングキャンカー、写真1）の早期せん除が対策として有効である。しかし、春型枝病斑を探し出すことは難しく、生産者への技術の普及が進まなかった。

そのような中、豊橋市内のモモ生産者が春型枝病斑の早期せん除の目安を考案した。今回はこのせん除の目安について紹介する。

## 2 モモせん孔細菌病の発生生態

モモせん孔細菌病の病原細菌は、前年秋までに新梢の皮目や落葉痕から侵入して越冬する。気温の上昇とともに病原細菌が増殖し始め、紫黒色の病斑（春型枝病斑）となり、雨滴により葉や果実の気孔、あるいは傷口に移動し感染が広がる。夏期には、新梢に夏型枝病斑（サマーキャンカー）と呼ばれる春型枝病斑と同じような病斑ができ、こちらも感染源となる。したがって、早期のせん除が非常に重要となる。

## 3 考案されたせん除の目安

生産者が考案したせん除の目安は、展葉始期の枝の状況である。例えば、写真2の開花前（3月下旬）の枝、写真3の展葉初期（4月中旬）の枝において、赤丸で囲った部分の芽が欠損している。また、写真4の展葉初期の枝では、赤丸で囲った部分の葉の伸びが悪い。このように芽が欠落している枝や春になっても展葉しない枝、健全な枝に比べて展葉が遅れている枝を「疑わしい枝」とし、せん除するように努めている。判断の時期が遅くなると展葉状況の差が分かりにくくなるため、当地域ではせん除を4月下旬までに行うこ

とが望ましい。

また、このせん除を実施する場合、将来結果枝が不足しないように冬期せん定では結果枝を1～2割多く残す。この割合は、前年の発病状況によって変動させる。



写真2 開花前の時期における疑わしい枝(左)と健全な枝(右) (赤丸部の芽が欠損している)

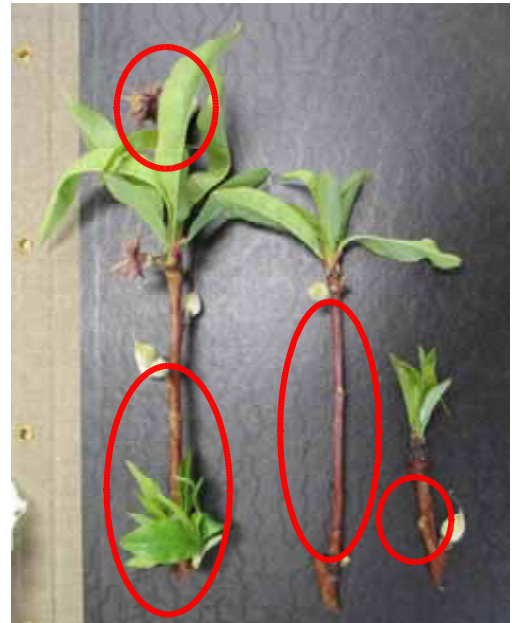


写真3 展葉初期における疑わしい枝(赤丸部の芽が欠損している)

#### 4 地域への技術の普及

本技術は、考案した生産者により地域へ紹介された。講習会で、せん除された枝の写真配布し、さらに現地ほ場で疑わしい枝を実際に切除して、健全な枝と見比べることを2～3年続け、地域に技術が普及した。この結果、地域におけるせん孔細菌病の被害が少なくなってきた。

#### 5 おわりに

モモせん孔細菌病対策には、早期せん除のほか、枝の徒長を抑えることを目的とした施肥設計の見直しや秋期せん定の実施などの耕種的防除、薬剤散布などの化学的防除、防風などの物理的防除を組み合わせた総合的な対策が必要である。

今回紹介したせん除目安は感覚的であり、現地で正常な枝と疑わしい枝を見比べ、さらに経験を重ねることにより、徐々に習得できる技術である。現在、農業総合試験場が主体となって、せん除された枝の特徴を数値化し、より明確で誰でも実施できるせん除の目安の確立に取り組んでいる。



写真4 展葉初期における疑わしい枝(左)と健全な枝(右)(赤丸部の葉の伸びが悪い)

Copyright (C) 2017, Aichi Prefecture. All Rights Reserved.